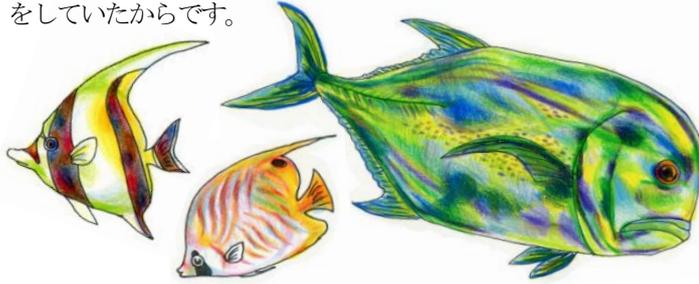


特集：卒業

茗溪会筑波大学支部賞を受賞して —浮気者が愛でたもの—

恩田 美紀 (筑波大学 生物学類 4年)

「学類に貢献した人」に、この「茗溪会筑波大学支部賞」は与えられるそうです。このような名誉ある賞をいただけて、大変嬉しく思います。しかし、私は生物学類の学生として理想的な生徒では無かった気がします。なぜなら、私は生物学以外に「浮気」をしていたからです。



私が生物学の道を選んだ理由は単純で、高校の生物の先生が好きだったからです。先生は他の先生と全く違いました。まるで先生らしくないのです。はっきり言って、授業はわかりにくいし、生徒指導もできていませんでした。しかし先生は、世界はまだまだわからないことだらけで、面白いことで満ちていると教えてくれました。生物学にとどまらず、化学も物理学も、数学も倫理学も、分野の壁をぶち抜いて、面白いことを教えてくれました。私は知的欲求を満たすことに喜びを感じるようになりましたし、こんな魅力的な人たちにもっと出会いたい！と感じました。そこで勝手に、生物学を愛する人には魅力的な人が多い、と私は定義しました（なんて短絡的な考えなんでしょう、あながち間違っていないとも思いますが）。

生物学の道に進むことを後押ししたのは、彼だけではありませんでした。当時何にでも積極的に行動していた私は（いまでは随分フットワークが重くなりました、初心忘れるべからず）、筑波大学開講の高校生体験授業に参加しました。下田臨界実験センターで行われたものです。そこで出会った人たちは期待通りの魅力的な方々でした。見たことも聞いたこともない生き物のことを熱中して研究している、そのマニアックさに惚れました。生き物の不思議さ、面白さを、熱を込めて伝えてくれました。この体験授業によって、私は筑波大学の生物学類を選ぶことを余儀なくされた、と言えるでしょう。

生き物が好きだから！という一途な想いとは異なって、何でも新しいこと知るのが好きだ、という多感な自分を動かしたのは「学問」ではなく、学問をやってる「人間」でした。

実に、この性格に適した制度だと思うのですが、筑波大学では専門分野以外の授業を自由にとることができました（総合大学パンザイ）。4年間、多くの魅力的な学問と人間に出会うことができました。はっきり言って教科書の中身くらいしか頭になかった私は、ありとあらゆる思想を浴びせられ、あっちに行ったりこっちに来たりとブレながら、自分の軸を形成していきました。

そんな中、私の心をもっとも強く惹きつけた授業があります。「現代美術論」です。他の授業と違って、この授業で学んだことは私の考え方をぐねっと変えてしまいました。（とはいっても、完全に理解するには難し過ぎる内容だったので、うまく文章で表現できませんが）要は、「美」の重要性を感じたのでした。「美」は、誰もが本能的に欲し、日常生活で体験でき、ノイズなく感性に直接つきささるもので、よっぽど信頼できるものだと思います。こうして私は美学を重んじるようになったのですが、冷静に考えて芸術で大成するような才能は無いし、そこまでロマンチストではありませんでした。そこで、自分ができる範囲で夢描いたことは、科学を芸術的に伝えたい！ということでした。

家族に研究の話をする時「それが何の役に立つんだ？」と言われる。科学は面白いけど、共感できない寂しさがあります。高校生の時に感じた、魅力的な人間が話す魅力的な世界、それを人に伝えたい。感性に直接スッと入るように、科学の魅力を表現できたら…。

高校時代、そして大学時代に強く惹きつけられた科学と美学。自分の軸の中心にあるこのふたつから、いくつかの絵が生まれました。「科学っていいもんだな」って（それが科学的な魅力に惹かれているのか芸術的な魅力に惹かれているのかはこの際考えずに）、科学ってものが身近におもしろいものとして受けとめてもらえるような環境を作っていきたいです。



「絵は、描いた人間の身をを表す」と、小学校の美術の先生が言っていました。科学は面白いと感じている私の絵から、科学の魅力がにじみ出ていたらいいな、なんて考えています。

Communicated by Takeo Hama, Received April 2, 2013.